

俵屋宗達の料紙装飾における季節表現

——ベルリン本四季草花下絵和歌色紙・畠山本四季草花下絵和歌巻を中心に——

小林真結（畠山記念館）

宗達が主宰する俵屋工房において慶長年間を中心に制作されたと考えられる料紙装飾が、現在多数遺されている。特に現存作品に恵まれ、比較検討の容易である四季草花下絵色紙群に関しては、伊藤敏子氏や中部義隆氏が、それぞれ雲母摺装飾の版木や色紙における空間表現に注目し、制作順や制作年代の推定を行っている（伊藤敏子『光悦色紙貼交屏風』平凡社・1974年、中部義隆「新出の伝宗達下絵光悦書「四季草花下絵三十六歌仙和歌色紙」について」『国華』1219号・1997年）。本発表ではこれらの先行研究を踏まえ、色紙組の本来の組物としての性格から生まれる四季表現の展開という側面から考察を加えることで、宗達料紙装飾の展開や制作年代に関する議論に新しい視点を与えると共に、宗達料紙下絵における時間表現について論じる。

発表の前半においては、桜山吹図屏風貼付色紙、『国華』1219号所収三十六歌仙和歌色紙、秋草図屏風貼付色紙、ベルリン国立アジア美術館所蔵色紙の四組を主に取り上げ、各組のモチーフ選択と彩色・金銀泥下絵の描写の特徴を分析する。いずれも組物として四季を表現するものであるが、前二者が従来の料紙装飾と共通する説明的・羅列的なモチーフ選択を特徴とするのに対し、後二者は複数枚の色紙を連続的に用いて同一のモチーフを描き、それを微妙に変化させることで季節の推移を表す手法を用いていることを指摘する。特にベルリン色紙においては一枚の色紙の中にも時間表現を看取でき、それが高度な水準に達している。以上の分析から当該の作品群の制作順が推測され、それは前述の先行研究において推定されてきた制作順とおよそ一致する。

発表の後半においては、色紙組における四季表現と、畠山本四季草花下絵和歌巻などの卷子本との関わりについて述べる。畠山本においては、梅が蕾から満開になったのち枝が画面外に出ることによって時間の経過を表し、その先についた僅かな花で季節の終わりを表すというような、卷子本の進行方向に従った時間表現が展開されている。この連続的な時間表現は、発表の前半で指摘するベルリン色紙等の季節表現の特徴と一致しており、卷子本における試みが色紙組における時間表現に活かされたと考えられる。また畠山本に描かれた竹、梅、躑躅、鶯という四種の植物は、先行研究においてはそれぞれ冬、春、夏、秋の四季に対応するものと考えられてきたが、色紙組のモチーフ選択との比較から、この季節の対応関係に再考の余地があることを併せて指摘する。

本発表では以上の二点を骨子とし、宗達料紙装飾がその特質の一つである高度な時間表現を獲得するに至る経過を明らかにする。